

近世後期武芸における修行観

序

江戸時代後期になると、幕府の規律がゆるみ、風俗は退廃していった。いわゆる文化・文政期（一八〇四―一八二九）がその著しい例である。一方、十八世紀末頃よりロシア、イギリスの艦船がしきりに来航して通商を求めたため、海防論が起こり、心ある武士層の間に危機意識が高まつてきた。このような情勢を反映して、武芸観も江戸中期の精神主義から実用主義へと転換したのである。

文化七年（一八一〇）に書かれた『剣談』¹は、常静子すなわち肥前平戸藩主松浦峯岐守清（静山）の作である。静山は、宝暦十年（一七六〇）江戸浅草の藩邸で生まれ、幼名を英三郎、長じて清と称し、安永四年（一七七五）僅か十六歳で六万七千石の平戸藩主を世襲した。

その後彼は、在任（一七七五―一八〇六）三十年余、幕府との交渉も宣しく、藩政に携わっては、農業を盛んにし、漁業を指

笠井 哲

導し、財政を豊かにし、藩校維新館の設立など文教を興し、厚生・敬老の民政にも意を注いで、平戸藩中興の名主と呼ばれた。また文武両道の達人であり、詩歌・書画など多趣多芸であった。彼は若い頃より青雲の志高く、権門にも出入し、上下の事情に通じ、幕閣へ進出の企図もあったが時運を得ず、病のため一八〇六年、四十七歳で隠居した。その後は「江東の隠者」と称して研鑽を積み、五十四歳で「心形刀流剣法家伝」を、六十八歳で「日置流射業免許」を受けている。六十二歳より筆を執った『甲子夜話』²は、江戸期における随筆の白眉とされており、さらに武芸に関しても数多くの著作を残している。³

『剣談』は全文が九十一条で、簡条書きに所論を並べてあるが、系統的な著作ではない。静山によれば、流名の「心形刀」⁴は剣心一如の姿を意味するもので、流派を越えた或いは一切の流派に共通した至妙の境地であって、同時に日常の稽古において欠かせない修行態度であった。私はこの小論で、『剣談』

における修行観について考察したいと思う。

一、合理的態度

『剣談』では、武芸修行における静山の合理的態度が打ち出されている。彼はその書き出しを次のように始めている。

太刀に順逆あり。逆なる者は勝たず。是れ逆は虚なるが故なり。(二八三頁)

それでは技の遅速についてはどうか。技を速くしようとする者は、自分の力量に頼ろうとするので、かえって技が遅くなると考えられる。剣術の理法に依拠して技をなせば、その技が遅いように見えても実は迅速なのである。

次に修行者は、師に対して如何なる態度をとるべきであろうか。

我が刀術の善悪を誨へらるゝとき、其の言は勝敗に於てすと知るべし。(同右)

すなわち、師から自分の刀術の善し悪しを教えられるとき、師のその言葉は試合における勝負を慮つての言と心得るべきであつて、徒らに「それが先生の流儀なのであろう」などと受けとるようでは、師の教への真意は理解できないのである。さらに次のようにもいつている。

聊かも師言を信ぜざる者は、とても其の奥を究むる人に非ず。然れども師、石火矢〔一〕大砲に勝つ太刀ありと云はん、是をも信ぜん人は、是も亦其の奥に至る人に非ず。(同

右)

師の言葉を信じないで慢心しているようでは進歩しないということは当然ながら、師の非合理性を見抜けずに盲信してしまう者もまた進歩しないのである。

次に静山は、技をどのように考えていたのであろうか。

剣術には、意外のわざ有る者にて、人より不意に勝を取らるゝなり。是は学者〔修行者〕の理に聞きゆゑなり。(三八四頁)

というのも人間の手足の動きは、大体定まった動きをするものであり、不思議な動きなどはないからである。その定まった手足の動きに二刀が具わったのが剣術であるから、刀だけ不思議な動きをするはずはない。つまり刀はいつも、人間の手足の動きに従つて動くのである。だから静山はいう。

此の理を知りて手足の動きを尽し見るときは、一通りの使用方は勿論、秘伝とても大抵自ら心にわかる者なり。(同右) 修行者は、今このように聞いても不審に思うであろうが、よく考え抜いて、試行錯誤し、自得した後初めてこの言葉を信じることができるといふ。初心者に対しては、こういつている。

初学とても混たもの工風して理を尽すべし。理を尽すとは、常に一本にても勝負の場合をためし見ることなり。(同右)

すなわち、初心者が道理を極めるためには、一本でも多く実際の勝負の場で試みてみよと、精進による自己開発を勧めている。では「形」については、どのように考えられているのである

うか。静山は次のようにいう。およそ表の形を使うときには、使い損じることもあり、その場合に同じ形を使い直すことがある。これはその形を基本通りに使おうとするもので尤もなことであるけれども、この心は剣術の道に適つたものではない。なぜならば剣術は、相手の変化に応じて自分が自由自在に動けるようにすべきものだからである。それゆえに、表の形にはそれぞれ変化応用の技が存在するのであり、このことを弁えなければそもそも剣術を学んだことにはならないのである。人の手足の進退は思いがけない変化をする場合もある。その変化を予め考えておいても、当たらない場合が多い。そういうときは、自分の心に従つて応じることができ、その即応の技が流儀の形にないことを恥とする者は、かえつて流儀の趣旨を知らないに等しいといえる。

本形の起ること変応の為なれば、思はざるの姿に、定まらざるの刀を以て勝つこと大いに尚ぶ所なり。(三三五頁)

つまり、剣術においては状況の変化に応じた自由自在な動きこそが望ましいのである。だから、形を使い損じたのを恥と思つて使い直そうとするのではなくて、理法にない太刀でも即座に使い凌ぐようにすべきであるという。剣術が実用を離れていた静山のこの時代には、教えられた形を上手に使いこなすことを第一義とする傾向がはびこつていたと思われる。さらに次のようにいつている。

表は皆勝負なりと心得べし。(同右)

すなわち、形はすべて勝ち負けの上に存在するものと心得てお

くべきなのである。これは宮本武蔵が『五輪書』の「水之巻」において、

何事もきる縁と思ふ事肝要也。

と、形や技はすべて相手を切るための手段と思うことが肝心であるとしている実用第一の考え方と一致するものである。

次に「事」と「理」について、静山はどう考えているのであろうか。彼は次のようにいつている。常智子先生(心形刀流甲州派)の口伝書にも「事理不偏」と専らに説かれてある。事とは「わざ」で、手足・心・体の働きである。理とは「すじ」・「みち」のことで、「わざの理」と「心の理」とがあるが、ここでいわれているのは、修行の筋道のことである。修行の筋道とは、「これはこうあらねばならぬ」とか「これは必ずこうなる」といったことである。静山は、

夫れ故剣術者も、口に云ふ事の手に出来ず、手に出来る事の口に言はれざる事は、得道の人にあらず。(三八九頁)

と、事と理のどちらか一方に偏るべきではないことを強調している。

ところで、剣術に諸流派がある理由は次のようにいわれている。

其の本、其の初師の得手の手くせより出でたるなり。因りて其の剣法の理に至りては、諸流一致なり。これ修行を積みては知らる、なり。(三九二頁)

したがって、流儀間の優劣を門下生がいつているのは、真実を知らないからであつて、どの流儀でも相対したとき上手の方が

勝つのであり、それが運命であるという。このように、徒らに自流のみを重んずることを戒めている。

ところで静山は次のようにもいつている。

予曰はく、勝に不思議の勝あり。負に不思議の負なし。(三)

九二頁

客が、「何故不思議の勝ちといわれるのか」と尋ねたので、静山は答えていった。

道に遵ひ術を守るときは、其の心必ず勇ならずと雖も勝を得。是の心を顧みるときは、則ち不思議とす。故に云ふ。又問ふ、如何なれば不思議の負なしと云ふ。曰はく、道に背き術に違ふ。然るときは其の敗疑無し、故に爾云ふ。(同右)

すると客は平伏したという。とかく勝負の世界には、精神力方能主義が入りやすい。しかし静山によれば、法則に従い技術を守ることが勝利を保障するのである。

それでは、秘伝とは何か。およそ剣術における秘事とは、決して他人に知らせずにひた隠しにすべきものではないという。なぜならば、その秘事とされる術を実際に試さないで、徒らに自分だけのものとしておいては、事に臨んでその術で勝つことはできないからである。

仮令、いか様の極秘にても、其の事を伝へ受けたらん者は、其の師とか、又は其の術を知る者と其の技を試みて、而る後秘とすべし。一切其の験無き者は、秘も秘と為すに足らず。

(同右)

このように静山は、試みなければ秘伝も無意味であると考えて

いる。

二、武芸の日常化

『剣談』には、武芸を日常生活の中に位置づけて、日常生活と一体のものと見る思想がうかがえる。静山は次のようにいう。試みに印可の意奈何んと問はゞ、喩へば目の見えぬさき迄を視ること有るべし。酒に沈酔して寐ねたる中、機変を知る心は有るべからず。茲を以て思ふべし。常を能くする者は、変に達する者と知るべし。印可の場他無し。(二三八頁)

つまり修行者は、日常生活の中で隙をつくらないように心掛けらるべきであって、「印可」(免許)の場は日常以外には存在しないのである。そして剣術者の理想の姿は、不意を打たれぬ心の修行であるという。

剣術者の心事は、酒を飲み、婦女に戯れ、或は箏、三絃杯を聴入りて居る中、後より撃ちかけられしとき、即便に打捨つる気合なるべし。此の心を常に工風して日を渉るべし。(同右)

さらに静山は、日常の動作を見るだけで、その人の剣術の技量がわかるという。

剣術には、人の動作を視て、其の伎の達するを知るべし。其の故は、常に物に頭を衝ち、立廻りに後なる物に臂を撞き、或は起たんとして戸障子などに触はり、或は据置きたる物に躓き、泥途にてすべり杯する者は皆是れ其の伎に於ても精心

ならざる人なり。因りて剣術には、常に人の動作を視置きて、其の人の分際を知るべし。(同右)
別の所でもまた同様にいつている。

先年或る人に言ひけるには、人の虚実は戸障子を開閉するにて知るべし。(三九六頁)

静山によれば、戸障子をザツと開け、ハタと閉めるような人は、その内面に隙がある。これに対してどんなに急いで出入りする場合でも、ソロリと開け、ソロリと閉める人は、心に隙のない人である。

是より予、此の事を心がけて、今に其の言を守れり。且つ稍々稍の功を知れり。晩年に至りて尚ほこれを思へば、弥々剣学は平心の術なり。(同左)

この「平心」について、次のようにもいう。

鎖細なる云ひぶんながら、侍人の次の間などに居て、物など書きて在る時、事に因りて呼ぶに、即ち答へて来る者、多くは其の執りたる筆を投げて起つ。(筆を投げ出す)其の響よく外に聞こゆ。我思ふに、此の筆を投ぐる者、其の心迅速に以て、其の実は虚なり。此の虚なる者、剣術に言はゞ、平心の礙げなり。(四〇七頁)

それでは、どうすればよいのだろうか。呼ばれて「はい」と答えて立ち上がるとき、筆を静かに響かないように置くべきである。静山によれば、このことをよく守っているならば剣の「平心」に至ることができるのである。けれどもこれは、初心者にとつては難しいであろうともいつている。

なお静山は、剣術の道場はあくまで楽屋であり、日常生活こそが本舞台であるということ、これを次のようにいう。諺に「楽屋に声を枯らす」というのがある。これは、本舞台に出る前に声が出なくなってしまうという意味で尤もな言葉である。およそ、近頃講釈などといって席に並んで経書の講義を聴く者を見ると、彼らは誠に厳めしく立派な面持ちをしている。しかしその講義を退席すると、或る人は溜め息をつき、或る人は欠伸をしたり、或いは笑い戯れるというように、忽ち講義の主旨とは違つた様になつてしまつてゐる。これは、講義の席を表向きと思ひ、日常生活を裏と思つてゐるからであり、上述の諺の通りなのである。

だがよく考えてみれば、講義の席はものを学ぶ所であるから楽屋のようなものであつて、日常生活がこの学んだものを実際に行う所であるから、舞台であるといえる。

楽屋は調ととを合はする場処とと也、如何やうにもことを改め替へらる、なり。舞台に出で、は取返しはならぬなり。茲を能く察ふべし。剣技も斯くの如くにて、けいこ場は裡なり。平常は表向きなり。夫れをけいこ場にてさへ見事なれば事済むと心得居るは、畢竟愚なる故なり。剣技も、けいこ場は楽屋にして、平常は舞台なること能く弁ふべし。(四一〇頁)
舞台の上においてやり直しは許されぬものであるが、道場ではいくらでも練習することができる。静山は、このように剣を学ぶ者が楽屋と舞台とを履き違えてはいけないという。次に試合をするときの心を持ち方について

仕合をするには、高慢らしく有るは宜しからず。夫れとして遜恭なるは宜しからず。唯平心にして、勝負の処を得と胸に思ひて為すべし。(三八五頁)

と、ここでも「平心」を心掛けるべきことを勧めている。なお剣術は刀の業であるけれど、たとえ無刀であっても万事に機敏である方が、帯刀していても隙だらけの者よりはるかに優っている。静山によれば、このことをよく心掛けて日常生活を営み、それがそのまま事に臨んで活きるようであれば、これこそ奥義なのである。そこで「裸の剣術」ということがいわれる。

裸とは空手(「無刀」なる者を謂ふなり。又裸体をも謂ふ。喩へば、裸体にても手に物あらば勝つべし。身に金鉄をまといたりとも、空手にては如何ん。然れば裸の剣術とは云へり。空手の場に剣術あり。(三八七頁)

この工夫を成就する人が、剣術の達人である。ところで「平心の術」については、次のようにもいわれている。よく方々で他流試合などといって、相手と技を戦わせ、誰々は誰々に勝つたと誉めそやしている。おそらく、その誉められた人は、自分の技が勝れているのだと思うであろう。だが静山は、そうは考えていない。

当流(心形刀流なり)の意を以て言はゞ、一時の勝は、終身の勝に非ず。仮令、其の人に勝ちたりとも、これ終身の勝と為すべからず。秘事なれども云はん。勝たんとするに、一時を以て云ふは無一の術、終身を以て云ふは平心の術なり。若し剣生能くこの義を悟らば、即ち是れ皆伝の人なり。(四一

二頁)

一時の勝利、生涯の勝利とは如何なるものであろうか。あらゆる勝負には絶えず偶然的な要素が付きまとう。たとえ勝つたとしても、徳幸による怪我勝ちということかも知れない。そういう一切の偶然を排除して、なおかつ優位を占めてこそ、真の勝者なのである。

なお静山は、皆川淇園から古代中国の舞踊は、単なる遊びではなくて礼楽の一芸であり、筋肉を勞し血脈を整え、四肢を柔軟にし、体の動きや歩走の動作とともに楽に合わせ、斧のような武器や鳥毛を付けた旗指し物を持ち、武備演習をするということを聞きこいう。

今の剣伎も、歴々と称する者は、必ず其の剣心の妙を得ずとも、等閑の思なくして、養生の爲にも之を守り用ふべき事なり。(四〇一頁)

このように武芸は、静山によって日常の健康法として考えられるようになつたのである。

三、芸徳一致

さらに静山は『剣談』で、武芸の技法・心法を追求しようとする態度と共に、それを儒教的な武士像の達成にたけに向けようとする。

例えば、静山は孔子を剣術の達人のようであるという。およそ剣術者の心掛けは、たとえ相手が聖人であろうと、相対した

ら一刀のもとに打ち捨てるべきである。けれども、今孔子の行状を思い浮かべてみると、これこそ剣術の極意に達した人である。誰も孔子が剣術の達人であるとは聞いていないであろう。しかし静山は、孔子に太刀を持たせ相対したら、自分が負けるのに手間どらないという。そしてその証拠として次のようにいつている。

論語郷党篇に云ふ、孔子、郷党に於て恂々如たり。言ふこと能はざる者に似たり。其の宗廟、朝廷に在すや、便々として言ひ、唯だ謹めり。朝にして下大夫と言へば、侃々如たり。上大夫と言へば、誾々如たり。君在せば、蹞蹞如たり、与々如たりと。…中略。この余の事も論語に見えられども、皆此の趣なり。(三九三頁)

以上のことから考えると、孔子は内面も外面も少しも油断がなかったことがわかる。だから次のようにいわれている。

此の様には、拙も我輩の剣術にては、夫子は何程つけ窺ひたりとも、所詮打出すべき穴は有るまじ。(同右)

次に剣術者で『剣談』が挙げるのは、『武芸小伝』における塚原卜伝の逸話である。それはおよそ次のようなものである。卜伝が江州の矢走で乗合船に乗っていたとき、或る男が剣術のことでしきりに彼に抗言してきた。そこで卜伝は、「私も若い頃から兵法の稽古をしたが、今まで人に勝とうと思つたことはない。ただ人に負けぬように修行する以外に道はないと思う」といった。すると男が、「さてさて優しい御坊かな、では兵法は何流であるか」と尋ねたので、卜伝は「ただ人に負けぬため

の無手勝流である」と答えた。男いわく「無手勝ならば、御坊の腰の双刀は何のためのものか」。卜伝が「この以心伝心の双刀は、我に驕る心が起るのを斬り、悪念が兆すのを断つためのものである」と答えると、男は「では御坊と試合をしよう。手なくしてどうして勝てようか」といつた。そこで卜伝は「私の心の剣は活人剣であるけれど、対する人が悪人ならば、そのまま殺人刀となる」と答えた。静山は、ここから卜伝を平凡な剣術者達は、臆病者と見るかも知れないけれど、

雷風は平らかなること無しと、斯の言にあり。卜伝の名人と称せられし、宜なり。予が剣談を見る者、此の義を味へ。(三九八頁)

といつている。

さて静山は、純粹の剣心というものについて次のように語っている。自分は若年の頃、剣技に精を出し勝負のために体を痛め付け力を尽くしたものである。このようなとき、皆川淇園に入門以前であったが、或る年、伏見に上る船の中で淇園と語りあかしたとき、こんなことを尋ねてみた。「自分は剣技には頗る体力を使いました。さて今先生を見ると、双刀を帯びておられるが、おそらくそれを意のままに使われることはできないのではないのでしょうか。今私が斬りかかったとして先生にはこれに対してなす術がありませんか」と。すると淇園は答えた。「私にはあなたのいうことがよくわからない。私のもとより見ての通りの文人であるが、双刀を帯びるからには、そこに志を持っているのである。あなたの言葉が本当ならば、たつ

た今、私を斬り殺そうとなさるべきである。私の志はそのときあなたに示しましょう。もしあなたが言葉と裏腹に、それをおやめになるならば、あなたは嘘をつかれたのである。それが嘘ならば、あなたの剣術といつても何ら畏れるに足りません」。

静山はこのとき、淇園の言葉が道義に則つたものであることを悟り、また剣技の真心を知つたという。先生のお言葉のように、自分はこのとき先生を脅かすに及ばなかつたのである。なぜならば、刀を抜くことができなければ先生を斬ることができないからである。すなわちこれが先生の威厳なのである」。そして次のようにいう。

非道にして殺害を為す事能はざるは天〔道〕なるを、固より信ぜん者にして、斯の決定こそ誠の純粹の剣心なり。(四〇三頁)

すなわち、純粹の剣心とは、物を生み育てることを本来の働きとする「天道」に適うものなのである。

また静山は、剣術の道場において真剣勝負をするのは、行き過ぎであるといっている。剣術を学ぶ者にとって最も大切なのは、普段の修行である。それゆえ、修行の際にその技を真剣を用いるかのように行うべきである。これこそが真剣勝負の基礎となるのである。それなのに最近の修行者の様子を見ると、皆徒らに身の進退、手足の動きに捕われているばかりで、心気を動かすことについては考える者はいないからという。

頃日、礼の曲礼を読むに、喪に臨みては、則ち必ず哀の色有り。紳を執りては笑はず。楽に臨みては歎かず。介冑して

は、則ち犯す可からざるの色有り。故に君子は戒慎して、色を人に失はずと。此くの如く云へり。然れば古人も既に是の事には目は着きて居りたり。(四一―頁)

この『礼記』に書かれていることは、貴いことであるのはいうまでもないけれど、さらに剣術の基本であるとさえいいうるのである。ここでいわれる心構えは、非常の場合のことについていつたのではなく、君子が日常生活において自戒しておくべきことなのである。したがって次のようにいう。

劍生も之を思ひて、学場に於て敵に対すれば、戒慎して心気を逞しくし、犯す可からざるの色有らんを務むべし。(同右)

ところで静山は、剣術に奥義といつても、特別なことは何もないといっている。どれほど酩酊し泥酔している時であっても、その者が剣術の免許皆伝の者であるならば決して敗れないと、人は思うかも知れない。けれども酒に泥酔しているときは、手足を速やかに動かすことは、なかなかできないものである。こういう状態で、どうして勝てるわけがあるか。静山は、心形刀流の祖伊庭是水軒でさえも、おそらくこのような場を切り抜けることはできないであろうという。それゆえ静山が常稽子より授けられた心形刀流伝授の次第書には、次のようにいわれているという。

諸伝尽く畢り、事理も上達し、執心行状言ふべき所無くして、印可すべき人たらば、修行と年数の功を考へて、印可を与ふるなり。免状、印可及び□□太刀の名。秘刀ゆへ今こゝに記さず)、以上の伝授は、修行執心は勿論、其の人温良篤

実にして、実に免状印可すべき人にあらざれば許可せず。仮令、術卓出したりとも、行状正しからず、心志誠実ならざる人には、許可せざるなり。(三八九—三九〇頁)

このように、奥義を伝えようとする場合には、必ずその授ける相手の人品と行状が正しいか否かを見て、伝授しなければならぬのである。すなわち静山によれば、武芸の達人は同時に有徳の人でなければならぬのであった。

結 び

以上私は、近世後期の代表的な武芸書とされる『剣談』における修行観の特色について考究した。まず一における静山の武芸に対する合理的態度というものは、何に由来するのであろうか。それは、彼の武芸へのあくなき探究心であると思う。彼は平戸で藩政再建に没頭していたときも、剣の修行は怠らずに、技法に関する疑問を絶えず文書で江戸に尋ねていたという。

次に二では、静山の武芸の日常化について論述した。彼は剣術というものを、平心の術と考えていた。彼の「平心」とは、柳生宗矩のいう「平常心」とほぼ同義と考えてよいであろう。(1)しかし、宗矩が真剣勝負場合に「平常心」をもって行うことの必要性を説いているのに対して、静山は真剣勝負のような心気で行われる普段の修行の中から培った「平常心」を、そのまま日常生活に役立たせよというのである。

次に三では、静山が武芸を学ぶ者は同時に心も正しくなければ

ばならないとしていたことについて論述した。さらに彼は、当時の剣術者達は皆、何故武士が双刀を帯びているかを知らないといひ、

故にまづ其の本体を申さんには、武と言へる訳は、其の徳の事にして刀の事には非ず。因りて人の本体は、無刀第一なり。夫れより用心の為には刀をも帯するなり。(三九五頁)と、「帯刀無用論」を唱えている。治世において刀は、あくまで用心のために帯びてはいるが、それは活人剣であり殺人刀ではない。

以上のようにみてみると、『剣談』における修行観は、武士達が双刀を帯びていた近世のみならず、現代においても十分に通用するものであるといえる。しかもそれは、武道に限らず、我々の日常生活における心構えとして手本にすべきものであると思われる。

註

『剣談』からの引用は、武道書刊行会編『新編武術叢書(全)』(人物往来社、昭和四三年)により、文中にその頁数を記す。なお傍点及び「」は、筆者のものである。

(1) 富永好松編著『平戸藩の武芸教育——松浦静山を中心として——』(長崎出版文化協会、昭和六十一年)九—十頁参照。

(2) 『心形刀流目録序弁解』に、「夫れ心形刀とは、口伝・書伝も有れども、心は己が心、形は同じく躬の形、刀は

其の用ひる所の刀なり。然れば何流と雖ども、その理、

用を離るる者に非ず。之に依れば、心形刀とは剣技の総名にして、吾流のみ是を流儀と為べからず」とある。今村嘉

雄編『日本武道大系第一巻』（同朋舎出版、昭和五十七年）四〇八―四〇九頁。なお、心形刀流の起源・道統及び静山との関係については、富永、前掲書、五四―八二頁参照。

(3) 宮本武蔵『五輪書』渡辺一郎校注(岩波文庫、昭和六〇年)五七頁。

(4) 静山は、『剣放』の「何流と謂ふ流の義」の所でも同様のことを述べている。今村、前掲書、四九七頁参照。

(5) 江戸後期の儒者(一七三四―一八〇七)。京都の人で、名は愿、字は伯恭、淇園と号す。易の学問を系統的に明らかにして一派を立て、門下三千余。静山は賓師として尊崇した。

(6) 静山は天保一二年(一八四二)没。八二歳と当時としては長生きであったが、少年時代は病弱で、現代風にいえば、もやしっ子であったという。健康法としての武芸修行も存在しうるといふ『剣談』に見られる新しい武芸観は、そういう彼の生い立ちと無縁ではないであろう。『月刊剣道日本』81年10月号(スキージャーナル)五五頁参照。

(7) 『本朝武芸小伝』十卷。天道流の達人日夏繁高が正徳四年(一七二四)に著し、享保元年(一七一六)刊。武芸全般にわたる列伝形式の書としては最初のものである。

(8) 塚原卜伝高幹(二四九〇―一五七二)。鹿島神宮に参籠して兵法の奥義を開眼し、「一の太刀」を考案して新当流を称

した。

(9) 『剣談』は、『五輪書』、古藤田俊定の『一刀斎先生剣法書』と並び、「わが国の三大剣法書の一とされている」。小山龍太郎『真説・日本剣豪伝』(荒地出版社、昭和三十九年)二二―三二頁参照。

(10) 今村嘉雄他編『日本武道全集第一巻』(人物往来社、昭和四十二年)二四〇頁参照。

(11) 静山は、『四剣問答并或問』で「平心刀は、師傳に数義あれども、其の旨とする所は平常心なり」といつている。富永、前掲書、二〇〇頁。及び今村嘉雄編『日本武道大系第九巻』(同朋舎出版、昭和五十七年)二四五頁。

(かさい・あきら) 筑波大学大学院 哲学・思想研究科在学中